

平成 30 年 2 月 12 日

## 鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）留学終了報告書

鹿児島大学長 殿

鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）実施要項に基づき、下記のとおり報告します。

## 記

## 1. 報告者情報

所属/学年	法文学部人文学科/4 年	性別	女
卒業/修了 予定年月日	2019 年 3 月 31 日卒業予定		

## 2. 留学の概要

留学期間	開始年月日	2017 年 4 月 28 日	終了年月日	2017 年 12 月 28 日
留学のタイトル	外国語教育の可能性と異文化交流			
留学の目的と概要（実践活動部分には、下線を引いて下さい）（700 字程度）				
<p>将来的に英語科の教員免許取得および教職に就くことを目標としているため、海外における外国語教育の現状や手法等を知ることを通して、日本での英語教育と比較検討しながら、効果的な方法や切り口を学ぶことを目的として、8 ヶ月 3 学期間にわたり、オーストラリアの首都キャンベラに滞在し、<u>現地の幼稚園～高校までの一貫校 Namadgi School において、おもに 6 年生～10 年生の日本語の授業の指導補助、教材作成、課外授業の引率等、日本語の教員のアシスタントとして活動した。</u>授業内では、<u>単語や文の発音はもちろん、教員が全体の授業をしている間に個人指導をしたり、課題のチェックや補助をしたりした。</u>また、<u>指定の教科書がなかったため、教材となるテキストや課題を作成したり、日本文化について紹介する授業を担当したりもした。</u>Namadgi School の日本語の授業では、<u>多くの実践活動や課外授業も取り入れられており、関連のゲームや工作などの比較的取り入れやすい実践活動から、日本映画祭開催時に、日本語で上映される映画を鑑賞したり、日本食のレストランで日本食体験をしたりといった課外授業の補助や引率等も行った。</u>以上のような学校教育の現場でのボランティア活動を通して、言語教育だけにとどまらず、<u>教員として必要な心構えや技能についても知ることが出来た。</u></p> <p>生活面では、<u>5 つの家庭にホームステイをし、英語力の向上をはかるとともに、オーストラリアの文化や歴史を学ぶことができた。</u>学校でのボランティア活動やホストファミリーとの生活、休暇中の他都市への旅行などを通して、<u>多数の異民族の方々とも出会い、オーストラリアだけにとどまらずヨーロッパ、アジア各国の人々と異文化交流をすることができた。</u></p>				

## 3. 受入れ機関情報及びスケジュール

## (1) 受入れ機関情報

	1 ヶ所目の機関	2 ヶ所目の機関	3 ヶ所目の機関
--	----------	----------	----------



(500 字程度)

Namadgi School で JTA として日本語の教員のアシスタントを務め、オーストラリアで日本語がどのように教えられているかについて、様々な手法や工夫について学んだ。とくに、教員がネイティブスピーカーである JTA を、特に会話を中心とする実践活動、自然な日本語の教材作成などの面において積極的に利用していることがわかった。これは、日本における ALT に置き換えたとき、ALT を有効に活用するためのヒントにもなりうるものであると感じた。また、アシスタントの活用に限らず、日本食レストランでのお箸を使った食事体験、映画館での日本語の映画鑑賞など、課外授業の積極的取り入れや、電子媒体の有効利用等が多数発見された。電子媒体の活用については、多くの授業で生徒ひとりひとりが使用できる学校付属のノートパソコンの利用がなされたり、ホワイトボードと併用しての電子黒板での授業やパワーポイントでの説明がなされたりしていた。以上のように、日本での英語教育でも取り入れ可能な工夫を多数発見し、将来教員を目指すにあたって多数の役立つ情報を得た。また、生徒に英語で日本語の文法を説明することで、多数の文法用語や、説明するときの英語表現を身に着けることが出来た。加えて、現地のホストファミリーと生活をしたことにより、英語力の向上、オーストラリアの歴史や食文化、生活習慣などの文化面についても学ぶことが出来た。

6. 留学後に行う鹿児島地域を活性化する活動について述べてください。(500 字程度)

帰国後、都市内の異なる派遣先にて同じくアシスタントを務めた学生 4 人とともに、留学の成果発表を行う。将来教員志望の学生、小・中学校、高校の現職の教員を対象として、JTA プログラムを通して学んだことをもとに、日本における言語教育に活かせるものをフィードバックすることを目的とする。具体的な内容としては、日本の学校における ALT と同じ役割を果たす JTA としての活動経験から、ALT の有効な活用方法や、現地における外国語教育の現状や手法の工夫等、日本での英語教育ないし学校教育全般において取り入れられる点について、それぞれの派遣先での実体験やオーストラリアの教育制度などを交えつつ、プレゼンテーションを行う。個人としては特に、前述の ALT の有効な活用方法について、ネイティブスピーカーであることの言語能力の高さを活かして、教材作成やコミュニケーション活動では積極的に ALT が指導させること、ALT が食文化や遊びの伝達などを通して生徒の興味関心をひくことをテーマに発表する。これらにより、今後鹿児島地域での英語教育、学校教育発展のためにどのように働きかけていくべきかを考える機会とし、プレゼンテーション後には出席者との意見交換の時間を設け、教員志望の学生・現職の教職員とともに、それぞれの立場から鹿児島での英語教育に対する考えを共有することにより、それぞれの意見をより発展的なものにするねらいがある。

7. 留学を今後の自分の生き方にどのように活かすか、留学成果を活用して将来鹿児島地域に貢献できることは何か記述して下さい。(500 字程度)

今回の留学を通して、オーストラリアにおける外国語教育を考察してきたこと、ALT として活動してきたことで、外国語を教えることの難しさや課題、それに対して必要な工夫について知ると同時に、ALT が外国語教育の中で果たす役割を実感した。とりわけ今回の派遣先の学校では、日本語の学習は小学校 6 年生から開始されるもので、生徒にとってなじみの深いものではない。自分の第一言語で理解がしにくいいため、一度苦手意識を感じると放棄してしまう生徒も多い。そのような生徒に対しても、まずは日本の歴史や食文化、遊びなど、共感や興味をひきやすい分野の紹介や実践を随所に取り入れることで、学習意欲を高め、外国語学習に対する抵抗を取り除くといった工夫が見られ、日本で英語を教える際にも役立つと感じた。さらに、学校教育の現場で活動することによって、外国語教育だけでなく、日本にも通ずる学校教育の実情や教員として必要な技能についても知ることが出来た。また、オーストラリアでの生活やボランティア活動を経て、英語力の向上、オーストラリアの文化理解という成果を得た。将来鹿児島県内で英語科の教員を志望していることから、今回の留学経験で得た知識や経験を、将来的に教職に就いた際、自分が行う英語教育の中に取り入れていく予定である。とくに、自身の ALT としての活動経験から、

教員側として ALT を活用する際には、ALT の言語能力を積極的に利用し、効果的な活用の方法を考え、実践していく。また、成果発表のプレゼンテーションやその後の意見交換で共有された考えの実現にも尽力していく予定である。

平成 30 年 2 月 12 日

鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）  
留学後地域活性化報告書

鹿児島大学長 殿

鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）実施要項に基づき、下記のとおり報告します。

## 記

## 1. 報告者情報

所属/学年	法文学部人文学科/4 年	性 別	女
卒業/修了 予定年月日	2019 年 3 月 31 日卒業予定		

2. 留学後の鹿児島地域を活性化する活動の概要を、留学の成果との関係がわかるように記述してください。（700 字程度）

【活動のタイトル】 JTA 留学成果報告プレゼンテーション

【活動の期間】 2018 年 2 月 4 日

【活動の概要】

今回の留学 JTA(Japanese Teacher Assistant)プログラムにより、オーストラリアの学校で日本語教員のアシスタントとして活動してきたことで、学校教育の中での外国語教育の位置づけや課題、必要な工夫などについて知ることが出来た。また、日本における ALT と同じ役割を果たす JTA としての活動体験から、効果的な ALT の活用方法についても実感し、これを自分の発表テーマとした。これらのことをもとに、日本の英語教育については学校教育においても活用できる点について、留学成果発表会として、2017 年度の JTA5 名で、プレゼンテーションを行った。また、鹿児島県の英語教育発展のために、今後どのように働きかけていけばよいかについての意見も発表した。対象は、将来教員を志望している学生、小・中学校、高等学校の現職の教員、大学の教授や講師とし、鹿児島の学校教育発展に向けて必要なことは何か、一緒に考えた。プレゼンテーションの具体的内容としては、まずオーストラリアの学校教育制度を紹介し、次にそれぞれ異なる派遣先で活動してきた 5 名が、各校の特色や日本語教育の実情を紹介、それに沿ったテーマ設定で外国語教育に活かせる点についてプレゼンテーションを行った。個人発表が全体の結論へとつながるように、全体での順序や流れも打ち合わせをし、ひとまとめのプレゼンテーションに仕上げた。内容としては、オーストラリアの教育制度の実践を取り上げ、日本語を担当する教員が日本人である学校とオーストラリア人である学校を比較検討、他民族の子どもへの対応や ALT の効果的活用法について取り上げた。個人としては前述の ALT の効果的活用法をテーマとして、授業内での発音・会話等の分野を積極的に担当したこと、補助教材の作成を担当し、より自然な日本語を取り入れられたことなど、自身が担当して効果があったと感じたところを紹介し、日本での英語教育の中でも取り入れられる ALT の有効活用方法を探した。以上のことを発表し、鹿児島での英語教育でも活用しうる点を提案し、プレゼンテーション後には意見交換の場を設けて、学生と教職員がそれぞれの立場からの意見を共有した。

## 3. 鹿児島地域を活性化する活動の成果と今後の課題と展望について述べてください。(700字程度)

留学成果発表のプレゼンテーションを行い、自分たちがオーストラリアで体験・考察してきたことを通して、鹿児島の学校教育発展のために、今後どのようなことが出来るかについて、プレゼンテーションを企画し、発表したことを通して、今後教職員を目指すにあたって必要となること、将来的に自分の英語教育の中でどのような工夫が必要なのかということについて、再度考える機会を得ることができた。

JTAとして活動する中で、外国語教育の難しさのひとつとして、自国の言語で理解がしづらい点、そのために生徒が抵抗を感じやすい点があると考えた。この部分への働きかけとして、実際に自分が行った日本の文化的背景の紹介や、食文化や遊びなどを実体験する機会を設けたことは、普段あまり授業に参加しない生徒、到達度の低い生徒を含む生徒全体の興味を引き、学習意欲を高めるために効果的であった。これらの活動は一見、言語学習との関連が薄く感じられ、教科書学習より学習効果が劣るように考えていたが、このような実践活動を取り入れることは生徒の学習意欲を高め、より深い学習の基盤となりうると考えるに至った。

また、共同でのプレゼンテーションとすることによって、自分の派遣先だけでなく、他 JTA の派遣先の学校の特色や、それに合わせた外国語教育の工夫等を知ることができ、学校現場により、求められる工夫も違う場合があり、柔軟な対応が求められることもわかった。そして、プレゼンテーション後の意見交換の場を設定したことにより、学生と教職員それぞれの立場からの意見を共有することができ、学生どうしで構想するだけでは出てこなかった、現実に即した意見もあがり、自分たちの意見もより発展的なものにすることができた。今回はオーストラリアでの日本語教育の中にみられる工夫を取り上げたが、教職員からの意見でもあがったように、現時点での日本の学校現場では取り入れが難しいものも少なくなく、抜本的な改革が必要になる部分もあるのが実情ではあるものの、ALT の効果的な活用法などは、日本での英語教育にも活かすことができる部分があり、可能なものから積極的に取り入れつつ、今後外国語教育の現場が変化しても柔軟に対応できるように、また、体験してきたことを通して考えた効果的な指導法を提案できるように、今回学んだことを常に念頭に置いておくことが重要と考える。